

民間部門農林水産研究開発功績者表彰受賞者の業績概要

【農林水産大臣賞】

業績名	「密苗」栽培技術による田植作業の革新的省力・低コスト化の実現	
受賞者	いせむら ひろし どい くにお 伊勢村 浩司、土井 邦夫（ヤンマーアグリ株式会社） 〈大阪府大阪市〉 さわもと かずのり 澤本 和徳（ヤンマー株式会社） 〈滋賀県米原市〉 ぶった としひろ 佛田 利弘（株式会社ぶった農産） 〈石川県野々市市〉 はまだ えいじ 濱田 栄治（農事組合法人アグリスターオナガ） 〈石川県羽咋市〉	
<p>〈業績概要〉</p> <p>水稻の移植栽培において、育苗トレイに稲種子を高密度で播種し、その苗マットを細かく掻き取ることで育苗マット数を削減する「密苗」栽培技術を開発し、田植作業の革新的な省力化、低コスト化を実現した。本技術は、北海道から九州まで地域を問わず導入されており、作付品種も50種類以上の実績がある。また、更なる取組として、密苗仕様田植機だけでなく、既販田植機向けの「密苗キット」を開発し、日本国内のみならず海外でも普及、実証試験を行っている。</p>		

【農林水産技術会議会長賞 民間企業部門】

業績名	作物育種を加速する培養不要で汎用性の高い革新的ゲノム編集技術の開発	
受賞者	はまだ はるやす みき りゅうじ たおか なおあき なぎら ようぞう 濱田 晴康、三木 隆二、田岡 直明、柳楽 洋三 (株式会社カネカ) 〈兵庫県高砂市〉	
<p>〈業績概要〉</p> <p>従来の遺伝子導入技術において、長時間を要し、適用拡大の阻害要因となっていた組織培養工程を不要とし、育種プロセスの大幅な簡略化を可能とする遺伝子導入法「インプラントパーティクルボンバードメント（iPB）法」を開発した。この手法により、これまで遺伝子導入が不可能であった作物において、ゲノム編集技術の適用を可能とし、コムギ、ダイズ、トウモロコシ等主要作物における有用品種の開発を劇的に加速できることとなった。</p>		
業績名	肉用牛産肉形質のゲノミック評価技術及び評価実施体制の確立	
受賞者	くろぎ かずひと おぎの あつし のざき たかよし わたなべ としお 黒木 一仁、荻野 敦、野崎 隆義、渡邊 敏夫 (一般社団法人家畜改良事業団) 〈群馬県前橋市〉 おのぎ あきお 小野木 章雄 (元 一般社団法人家畜改良事業団)	
<p>〈業績概要〉</p> <p>従来の遺伝的能力評価法（BLUP法）に一塩基多型（SNP）情報を付加した s s GBLUP法を用い、その有効性を検証しつつ、産肉能力のゲノミック評価法の確立を図った。この評価法は、血液や毛根があればSNP情報が得られることから、手軽に遺伝能力を推定できることや、きょうだい間の能力差を子牛の段階で推定できる。また、肉用牛の育種改良、優良雌牛の選定等において、本評価法を有効活用するための評価実施体制を構築し、育種改良団体や和牛繁殖農家等で広く利用されている。</p>		

【農林水産技術会議会長賞 民間企業部門】

業績名	「花けずりこんぶ」の製造技術の開発と商品化	
受賞者	つじみ しげかつ 辻見 重勝（東和食品株式会社）	〈岩手県宮古市〉
<p>〈業績概要〉</p> <p>日本の伝統的食品である昆布を、その食材としての能力を十分に発揮し、消費を拡大するために、薄く削り節状の小片に削る技術と製造装置を独自に開発し、世界初の薄肉小片こんぶ「花けずりこんぶ」を製造、商品化に成功した。また、岩手県宮古産昆布の高付加価値化を目的とした技術開発にも取り組み、製造ラインの高速化や加工に要するコスト削減を実現して販路を拡大し、地元の震災復興にも貢献した。</p>		

【公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会会長賞】

業績名	てんさい、たまねぎの安定生産に有用な微生物資材の開発と普及	
受賞者	ゆうようびせいぶつしざいかいはつぐるーぶ 有用微生物資材開発グループ 代表 みくち まさと 三口 雅人 (十勝農業協同組合連合会)	〈北海道帯広市〉
<p>〈業績概要〉</p> <p>様々な植物の根に共生するアゾスピリラム菌は、窒素固定能と植物ホルモン分泌による根の伸張促進機能を有する土壌微生物であり、このアゾスピリラム菌を混和した微生物資材を開発した。この資材は、移植作物を対象として育苗期間中に1回、灌水作業と兼ねて施用するだけで生育促進効果が認められるものであり、てんさい、たまねぎでは根量の増加とともに、収量増が可能となった。今後も、このアゾスピリラム菌を活用した収量の確保や安定化が期待される。</p>		
業績名	生物農薬スワルスキーカブリダニを中心とした総合防除技術の普及	
受賞者	やまなか さとし 山中 聡 (アリストライフサイエンス株式会社)	〈東京都中央区〉
<p>〈業績概要〉</p> <p>薬剤抵抗性の発達したアザミウマ類やコナジラミ類を捕食するカブリダニ類に着目して、微小害虫専用生物農薬の国内登録を推進するとともに、これまで総合防除（IPM）技術が構築できなかったピーマン、パプリカ、ナス、キュウリ、カンキツ等の多くの作物で、スワルスキーカブリダニ製剤による密度抑制効果を確認し、化学合成農薬の大幅な使用量削減を達成した。また、スワルスキーカブリダニ製剤を利用したIPM防除体系は、全国的に見ても施設ピーマンで95%、ナスで70%、キュウリで30%以上の普及面積率に達しており、さらにハウスミカン、花卉類等慣行防除主体の作物へも本剤を利用することでIPM防除体系が波及してきている。</p>		